Ⅱ　指導事例

指導事例①　落ち着きがなく学習が定着しない児童に対する通級指導学級の指導と在籍校での校内支援の充実により改善がみられた事例

対象児童

小学校２年生　通常の学級に通いながら情緒障害の通級指導学級の指導を受けている。

１　背景

（１）生育歴

・２歳から保育園に入園する。落ち着きがなく危険に対する意識に欠けていた。

・小学１年の６月にＡＤＨＤと診断され、12月から週２日通級指導学級で指導を受ける。

（２）検査結果

・ＷＩＳＣ－Ⅲ（６歳５か月）全検査ＦＩＱ＝91　言語性ＶＩＱ＝92　動作性ＰＩＱ＝92

（３）児童の実態

・人なつこく、友達に声をかけてかかわっていこうとする。

・生活科、図画工作、体育等の学習には積極的に取り組める。

・算数、国語等では教室から出ていき、あらかじめ決められた教室で過ごすことが多い。

・言葉による指示に対して、聞き違いや混乱が見られる。

・日常会話は成立するが幼児音（さっき→ちゃっき、つかれる→ちゅかれる等）がある。

・書字は１字１字思い出しながら書く。「さ」と「き」の間違えや鏡文字を書くことがある。

・読字は、指で文字を追いながら拾い読みが多い。促音、拗音、拗長音等が正しく読めない。

２　通常の学級における指導

（１）指導方針と指導目標

〈指導方針〉

①興味・関心を大切に課題設定し、きめ細かく学習成果を評価し達成感や満足感をもたせる。

②一人一人を大切にした学級経営の中で区別のない対応を心がけ、本児の自尊感情を育てる。

〈指導目標〉

①学習に興味を持たせ、参加できる時間を増やす。

②行動の仕方を具体的に教え、友達と仲良く活動できるようにする。

（２）校内体制

・本児は、教室からどこへ行ってしまうか分からない状態だった。そこで、全校で協力体制を組み、校内で入ってもよい部屋（保健室、主事室、事務室）を決めてそれ以外は行かないというルールを作り常に教職員が対応できるようにした。

・本児への対応の仕方について教職員間で共通理解を図り、校内体制をとり本児の安全を図った。そのため学級担任も、安定した学級経営を行うことができるようになった。

（３）指導上の配慮事項と指導の結果

①学習に興味をもたせ、授業に参加できる時間を増やす。

・毎日の学習の流れを理解し、見通しをもつことができるようになってきた。

・好きな描画や作業的学習を取り入れ、友達と役割を分担し２時間程度活動に集中したこともあった。

・視覚的な教材を併用し「学習のポイント」に注目させたため集中できる時間が増えた。
・なぞり書きや名前を漢字で書く学習を取り入れ意欲や満足感が得られる場面をつくった。
・学習内容を10～15分ごとに区切り、自ら集中しょうという気持ちが見られるようになった。
②行動の仕方を具体的に教え、友達と仲良く活動できるようにする。
・教師は、本児の言動を十分受け止め、失敗時の対処法を具体的に教えて行動が落ち着くようにした。
・評価カードを使って学習成果をほめたり、「良いこと」「いけないこと」を具体的に理解させ、マイナス行動を減らすことができた。
・他児と同じ視点で指導することで他児が本児を理解し、友達関係が育ってきた。

3　通級指導学級における指導

（1）指導方針と指導目標

〈指導方針〉

本児の興味関心のある教材を取り入れながら、授業に集中して取り組める力を付ける。

〈指導目標〉

①集中力を高め、読み書きの学習に落ち着いて取り組めるようにする。
②手指の巧緻性、運動機能の向上を図る。
③いろいろな場面に応じた適切な行動をとれるようにする。

（2）指導内容と指導の結果

①集中力を高め、読み書きの学習に落ち着いて取り組めるようにする。
・視機能訓練（動くペン先を追視する等）により、集中して字を目で追えるようになり、とばし読みが減り、字の形を正確にとらえて書く力が付いてきた。
・黒板の予定表を見て、日記帳を書けるようになってきた。
・なぞり、点結び、色塗りなどでは、線や枠を意識し、はみ出さなくなった。
・行間を広く空けて作った文章の活用により、指で示しながら読む力が付いてきた。
・ブロックやパズル等を使い形を構成する活動を通し、全体や部分を見る力が付いてきた。
②手指の巧緻性、運動機能の向上を図る。
・手、指を使う教材教具で学習し、線を意識してはさみを使うことができるようになった。
・全身運動，柔軟体操、同一姿勢の保持、ボール遊び等で体のバランス感覚が育った。
③いろいろな場面に応じた適切な行動をとれるようにする。
・多様な学習場面の評価カードを使い、良い行動を評価し、マイナス行動が減るようにした。
・ロールプレイを行い適切な言動を覚え教員や友達にうまくかかわれるようになった。

4　通常の学級と通級指導学級との連携

・交換ノートに、本人、保護者、担任、通級指導学級担任の記入欄を設け、連絡を取り合う。
・通級指導学級での学習用プリント等の教材や行動評価カードを通常の学級でも活用する。

5　まとめ

校内体制の確立のもとに、児童一人一人を大切にして信頼関係をつくり、それを基盤に温かい学級作りを行って本児に対する理解と協力関係を育てることができた。

今後は、通級指導学級との連携により基礎学力を付ける指導の充実が課題であると考える。

指導事例②　友達とのトラブルが多い児童に校内通級の利点を生かした指導を行い改善がみられた事例

対象児童

小学校４年生　通常の学級に通いながら校内の情緒障害の通級指導学級の指導を受けている。

１　背景

（１）生育歴

・発語が遅れ、思いが伝わらないといらいらしてものを投げたりすることが続いた。

・１歳半で保育園に入園。言われている事は理解できるようだが、言葉は増えなかった。

・入学後は落ち着かない状態が続き、１年生３学期に病院でＡＤＨＤと診断される。

（２）諸検査の結果

・病院で定期的に検査を受けており、メチルフェニデート（製剤名リタリン）を現在も１日２回服用している。

・ＷＩＳＣ－Ⅲ（９歳４か月）全検査ＦＩＱ＝69　言語性ＶＩＱ＝77　動作性ＰＩＱ＝66

（３）児童の実態

・他児との学力差が大きい。本読みはたどたどしく、文字を書くのに時間がかかり、平仮名やカタカナの表記も不正確である。漢字は２年生ぐらいまで書けるようになった。けたの多い計算では、誤りが多くなる。

・走る、投げる、跳ぶなどの動きはできるが、手足の細かい動きはぎこちない。

・思ったことを言葉で表現することができずに、先に手が出ることが多い。

・整理整頓が苦手で、持ち物の管理がうまくできない。忘れ物も多い。

２　通常の学級での指導

（１）指導方針

①本児の集団参加への意欲を尊重し、学級への所属感をもつことができるよう支援する。

②個別のかかわりをできるだけ多くもつことで情緒の安定を図り、友達とうまくかかわれるように支援していく。

（２）指導上の配慮事項と指導の結果

・座席を担任のすぐそばにし、出来る限り個別に対応できるようにしたところ、学習中に不適切な発言や行動をすることは少なくなってきた。

・担任との信頼関係を基盤にして、否定的な言葉かけは避けるようにした。本人の意図を周囲の児童に伝えながら、話そうとすることを受け止めるように心がけた結果、次第に発表の仕方も適切なものになってきた。

・学習面では、理解が難しい内容が増えており、個別の課題を用意し、基本的な読み書きや計算の力を付けるようにしている。その際、通級指導学級での教材も活用している。

・服薬については、保護者と連絡を密にし、服薬管理を徹底するようにしている。

３　通級指導学級における指導

（１）指導方針と指導目標

〈指導方針〉

通常の学級に適応していくためには、衝動性のコントロールと適切な意思表示、集団参加への意欲の向上が必要と考える。また、認知面でのつまずきを補う個別学習を工夫する。

〈指導目標〉

①自分の言動を意識し、自己コントロールする力を身に付ける。

②言葉で意思表示する力を付ける。

③読む、書く、計算する力を付ける。

（２）指導内容と指導の結果

①自分の言動を意識し、自己コントロールする力を身に付ける。

・強い声かけや理由を問い詰めるような質問は逆効果になるので、避けるようにしている。

・グループ活動では、活動の中に出てくるルール（順番を待つ、譲る、頼む、説明を聞いてから合図で行動するなど）を意識して取り組むようにさせる。

・言動での制止ではなく、学習チェック表の活用や絵カードを提示する等で自分の行動を意識させ、行動をコントロールできるようにした。

これらの工夫により、次第に自分の言動を意識できるようになってきている。

②言葉で意思表示する力を付ける。

・個別学習では、教員との会話を多く取り入れ話す楽しさを経験させている。

・グループ学習では、言葉を使ったゲーム等で友達とかかわる楽しさを経験させている。

③読む、書く、計算の力を育てる。

・自信のなさやあきらめの気持ちがあるので、簡単な問題から入り最後までやり遂げることを大切にしている。その結果次第に自信が付いてきている。

・図形の構成パズルやゲームを使って、視知覚認知学習を取り入れている。

４　通常の学級と通級指導学級の連携

○毎朝の情報交換を生かして、本児の状態に合わせた指導を柔軟に組み入れる。

通常の学級担任から得た情報をもとに通級指導学級の学習を計画し、本児に合わせてスモールステップで学習する。トラブル等があった場合にはソーシャルスキルの指導に組み入れる。

○通級指導学級担任が通常の学級を訪問指導する。

通級指導学級担任が校内の様子を観察した結果、本児のささいな行動に対して過剰に反応する児童がいることに気付いた。そこで、通級指導学級担任が、学級の友達に正しく理解させるため「温かい言葉かけを考える」活動という指導の機会を設けた。その結果、学級全体が友達との良いかかわり方を学ぶ機会になった。

５　まとめ

通級指導学級担任とともにクラス全体で本児に対する正しい理解とかかわり方を考えたことは、在籍学級の児童にとっても友達同士の良いかかわり方を学ぶきっかけになった。本児への声かけも上手になってきた。本児も次第に落ち着きを見せ始めている。さらに、友達と適切なかかわり方をするためには、校内の協力体制が必要である。

今後は、学年が上がっても周囲との安定した関係が維持できるように、通級指導学級との連携を深めながら本児の特性や配慮事項について全校体制で共通理解することが大切である。

指導事例③　読み書きに困難がある児童に得意な面を生かした指導を行い学習意欲を高めた事例

対象児童

小学校２年生　通常の学級に通いながら情緒障害の通級指導学級で指導を受けている。

１　背景

（１）生育暦

・幼稚園の年長時、運動が苦手なため登園拒否になった。

・園長より専門機関への相談を勧められ、ＬＤ（書字・読字）と診断された。

・１学年終了時、担任の勧めで通級指導を受けることになった。

（２）諸検査結果

・ＷＩＳＣ－Ⅲ（８歳）全検査ＦＩＱ－80　空間認知や、視覚的認知に課題が考えられる。

（３）児童の実態

・平仮名50音が読めるようになった。拗音や促音は読むことができない。

・視写はでき、自分の名前や数字は書くことができる。漢字は苦手である。

・植物や動物の知識が豊富で、パソコンの操作も得意である。

・ボール運動が苦手でボールを怖がることがある。

・持ち物の整理ができず、物を置いた場所を忘れがちである。

・会話は興味のある内容に偏りがちで、自分と違う意見は受け入れにくい。

２　通常の学級における指導

（１）指導方針

・教科学習の中で得意な面を生かし、学級の中で活躍できる工夫をし、存在感を高める。

・得意な面への自信を支えに、読み書きの学習に取り組む意欲を引き出す。

・学級の児童に対し本児への理解を促し、かかわり方を教えて友達関係を円滑にする。

（２）指導上の配慮事項と指導の結果

○得意な面を活用した指導を行う。

・生活科で、植物や動物に関する知識を披露し教材にも活用するという機会を作った。

・民間の専門機関や家庭での学習により、パソコンの扱いに慣れている。パソコンの学習では、友達が困った時にアドバイスをすることができ、本人も自信をもって活躍している。

○読み書きの力を付ける指導の工夫

・国語の漢字練習では、マス目の大きなノートを使用し本人が書きたい漢字を繰り返し書く練習を行った。２学期から平仮名が書けるようになり、書字に対する抵抗も少なくなった。

・授業中、担任がさりげなく声をかけ、字を書く際にはそばにつき一字ずつ書かせた。

・音読は、拾い読みだが一人でできるようになってきた。読めると学級の友達から拍手が起こり、これが励みとなって自分から進んで音読をするようになってきている。

○身の回りの整理整頓を出来るようにする。

・整理整頓が時間内に出来ないため、家庭に協力を求め整理用の箱を作った。時間内に片付けが出来ない物はそこに入れ、帰りに教師と共に種類分けして片付けた。定着して以来、日々の活動が大変スムースにできるようになった。

○学級の児童に本児に対する理解を求める。

・本児は得意な面がたくさんあるが、文字を読むことと書くことが苦手ということを学級の児童に話し、メモをとる際は友達の協力が必要だということを指導した。

・担任や周囲の温かい配慮の下、自己肯定感を持ち学校生活が送れるようになってきた。

3　通級指導学級における指導

（1）指導方針と指導の目標

〈指導方針〉

・読み書きの困難から教科学習への不安が強く、学校生活全般に消極的になっている。その改善のため得意な分野の学習活動を取り入れ、自信をもって課題に取り組めるようにする。

・苦手な読み書きに対しては、文字指導とその基盤となる目と手の協応動作や空間認知能力を高める指導の工夫も行う。

〈指導目標〉

・得意な面を活用した学習を通して、学習活動に自信がもてるようにする。

・発表の機会をなるべく多く設定し、学級内での存在感を高める。

・平仮名の読み書きの力を確実に付ける。

（2）指導内容と指導の結果

・地域性を生かし虫取り、畑仕事、自然観察等、本児の関心が高く得意な内容を取り入れた。

・畑で野菜を育て観察した成果を学級で発表させ、評価する機会を設けた。

・目と手の協応動作を高めるために点線のなぞり・塗り絵の学習を行うなど、楽しみながら読み書きの基礎学習を行い、筆圧が強くなってきた。

・空間の位置関係を学習するため、ブロックや文字パズルを使用し、楽しみながらできる課題を設定した。１単位時間の中で課題の種類を多くし集中力が高まる工夫をした。

4　通常の学級と通級指導学級、その他の機関との連携

・通級指導学級の担任が通常の学級に行き、休み時間を利用して本児が在籍する学級の児童と交流をした。本児の得意な面やかかわり方を教えることで本児に対する理解が深まった。

・通級指導学級での連絡帳を交換便を活用して通常の学級に届けるようにした。通常の学級で記入した連絡帳は、本児から保護者を経由して通級学級に戻るようにした。

・通常の学級、通級指導学級、医療機関、民間の専門機関が情報交換をし、指導内容について共通理解を図りそれぞれの役割分担を明確にした。

・通級指導学級の担任が積極的に通常の学級に入り指導する連携の在り方が効果的であった。

5 まとめ

本事例は、担任が本児への理解を学級の児童にうながし、本児の苦手な面について本人の心の負担がないように自然な形で援助したり、本児の得意な面を学習に活用するなどしている。

さらに、通級指導学級担任が通常の学級を訪問指導する等の様々な支援をしている。

今後は、通常の学級を中心に、通級指導学級、医療機関、民間の専門機関等が指導内容を共有し、保護者を含めて共通理解を図ることが大切である。そして、これらの関係諸機関が役割分担を明らかにし連携を強化することにより、本児が自己肯定感をもち生き生きと活動できるような支援をしていく必要があると考えられる。

指導事例④　対人関係の苦手な児童がソーシャルスキルを身に付けて言語によるコミュニケーションがとれるようになった事例

対象児童

小学校６年生　通常の学級に通いながら情緒障害の通級指導学級での指導を受けている。

１　背景

（１）生育歴

・３年時、言語の遅れはないが同学年の児童とコミュニケーションがとれなかった。

・学習面の遅れがあり、４年生の１学期スクールカウンセラーにＬＤの傾向を指摘された。

・４年生の２学期、通級指導学級に入級した。

（２）諸検査の結果

・ＷＩＳＣ－Ⅲ（９歳10か月）全検査ＦＩＱ＝74　言語性ＶＩＱ＝76　動作性ＰＩＱ＝78

（３）児童の実態

・両親、祖父母のなかで養育され生活経験不足の傾向がある。

・読みは、まとまりで読むことができるが意味が分かってない場合がある。

・あらかじめ用意した内容のスピーチはできるが、その場で考えて話すのは苦手である。

・リズム運動・ボール運動・鉄棒が苦手である。特に、動くボールへの距離感がつかめない。

・学習場面で気が散りやすく、注意集中が持続しない。

・集団への参加意欲はあるが言語による交流は苦手で、話を聞いていることが多い。

２　通常の学級における指導

（１）指導方針

・本児が、分からないことを質問しやすい温かい学級づくりをする。

・本児が自信をもって活動に参加できるように、個別の教材を用意する。

（２）校内体制

通級指導学級の指導報告書をもとに、管理職、養護教諭を交えたケース会を行い児童理解に努めている。同時に中学進学の方向性について話し合っている。

（３）指導上の配慮事項と指導の結果

・学習はできるだけ班単位で行うようにし、班編成では、本児が孤立しないように配慮ができる友達をメンバーの中に配置した。その結果、本児は疑問に思ったことを友達にたずねることができるようになった。話し合い活動では、友達の話を聞いていることが多かったが、班の一員としての自分の居場所があると認識できるようになり徐々に発言が増えた。

・中学進学に向けて、自分について考え自分を知る機会を設けた。本児用の「自己アピール」のワークシートを作成し、自分の好きなことや嫌いなこと、得意なことや苦手なことを整理し記入できるように工夫し個別に指導した。まとめたものを皆の前で発表することで自信がついてきた。

３　通級指導学級における指導

（１）指導方針と指導目標

〈指導方針〉

・コミュニケーションスキルを高める指導により対人関係をスムースにする。

・一人でできることを増やし、学習に見通しをもてるようにする。

〈指導目標〉

①日常生活に必要な言葉を理解し、表現力を高める。

②集団の中でコミュニケーションの楽しさを味わい、積極的に話すことができるようにする。

③自分で判断してできる活動を多く経験し、自信をつけ社会性を育てる。

（２）指導の内容と指導の結果

①日常生活に必要な言葉の理解と、表現力を高める。

・語彙を増やすため、小学生新聞を読み、教員と一つの単語から連想できる内容を考えたり言葉の仲間集めを行ったりした。

・言葉による表現力を育てるため、形容詞を提示し、その言葉に関連する名詞を探したり、四コマ漫画の吹き出しに言葉を入れたりして会話の面白さを学習した。また、時間の経過で変化した二枚の絵について、状況の変化を言葉で説明する学習を行い次第にストーリー性のある表現ができるようになった。

・自分の気持ちを相手に伝える経験をするため、場面に応じた対応の仕方を言葉で表すロールプレイを行った。表現が苦手なのでワークシートを作り、自分の気持ちを選択肢から選択させ適切な表現を行わせた。その結果、人前で話すことができるようになった。

②集団の中でコミュニケーションの楽しさを味わう。

・仲間と活動する楽しさを味わうことができるようにするため、週１回15分程度のゲームを３～４種類学習した。行動目標を設け、リーダーとしてゲームを動かすことを体験し、仲間と楽しくすごせるようになってきた。

③自分で判断してできる活動を多く経験させて自信をつけ、自己肯定感と社会性を育てる。

・自分でできることを増やすことをめざし、一か月間の保護者の援助により一人で電車通学ができるようになった。それまでの生活を本人が見直すことで自分の可能性を自覚するきっかけとなった。

・宿泊学習に向けて、少しずつシャンプーハットのひさしを切りとり、狭めていくことを家庭に提案し、一人で洗髪ができるようになった。保護者の意識の変化により、本児が強く拒否していたことにも取り組めるようになってきた。

４　通常の学級と通級指導学級、保護者との連携

・学級専用の連絡帳を、通常の学級の担任、保護者、通級指導学級の担任の三者が活用できるようにした。個別指導計画は、通級指導学級での課題を焦点化した後、通常の学級の担任、保護者と三者による面談を行い、共通理解のもとに作成して三者で活用している。

・進路相談を行うことで、保護者が本児の自立に向けた家庭での課題を考えるようになった。

５　まとめ

本児は、生活面で一人でできることを増やし、社会経験を積み重ねることにより生活全般に自信をもって行動することができるようになった、そして、それが学習に対する意欲を高めることとなり、言語によるコミュニケーション能力を向上させる結果となった。

今後は、中学校進学に向けて通常の学級担任、通級指導学級担任、保護者の三者が、本児の課題について役割分担をすることにより指導の構造化・統一化を図る必要があると考える。

指導事例⑤　注意の集中や読み書きに困難がある生徒が
中学校から通級指導を受け始め改善がみられた事例

対象生徒

中学校２年生　通常の学級に通いながら情緒障害の通級指導学級の指導を受けている。

１　背景

（１）生育歴

・小学時から多動で注意集中に欠け、学力に遅れが見られたため、学習塾に通っていた。
・小５から医療機関にかかりＡＤＨＤと診断される。
・中学校から通級指導学級に週１日６時間通い、２学期より通級日を２日間に増やした。

（２）検査結果

・ＷＩＳＣ－Ｒ（12歳７か月）全検査ＦＩＱ＝83　言語性ＶＩＱ＝71　動作性ＰＩＱ＝103

（３）生徒の実態

・明るく活動的で美術や体育等が得意である。
・注意の集中に困難があり話を記憶することが苦手なため、一方的に話したり話を繰り返すことが多く、会話が成立しにくい。
・読み書き、計算を伴う教科は、内容が理解できないため授業についていけない。
・相手の気持ちの読み取りが困難なため、友だちの声かけ等に対応できないことがある。
・教員との個別のかかわりの中で自分を出し、落ち着いて学習に向かうことができる。

２　通常の学級における指導

（１）指導方針と指導目標

〈指導方針〉

①本人が理解しやすいように指導方法を工夫する。
②意欲や自尊心を大切にしながら、話を聞き自己理解を深めさせる。

〈指導目標〉

①授業中、人の話を集中して聞き、黒板をよく見てノートに書き写す意欲を高める。
②自分の行動を振り返り、友達と協調できる態度を身に付ける。

（２）校内体制

・担任を中心に、学年の教員間で課題や困難についての理解を深めた。その結果をもとに各教科も含めて話し合いをもち、生徒間でトラブルがあった場合、本人に行動や感情を振り返る機会をつくること等、指導上の工夫について検討した。

（３）指導上の配慮事項と指導の結果

①授業中、人の話を集中して聞き、黒板をよく見てノートに書き写す意欲を高める。
・座席は本人の希望を配慮しつつ教員の指示が通りやすい前の方に決めた。さらに、視覚的な手がかりを併用しながら学習が進められるように指導の方法を工夫した。
・板書時、書く場所に目印を付けたところ、書き写すことに対して意欲的になってきた。
・通級指導学級での教材（漢字、計算プリント）から自分で問題内容や量を決め自主学習として取り組むことができた。
②自分の行動を振り返り、友達と協調できる態度を身に付ける。

・予定帳にその日の反省点を書き入れ、行動の振り返りができるようになった。
・得意な切り絵の技術の向上に伴い自信や意欲がつき、自分の言動を客観的にとらえることができるようになり相手の立場に立って考えられるようになった。

3　通級指導学級における指導

（1）指導方針と指導目標

〈指導方針〉

①指示を短くし、視覚的な手がかりを併用（実験の導入、実物の使用、見本の提示）する。
②得意な面を伸ばして、意欲を引き出す。

〈指導目標〉

①基礎学力の向上を図りながら集中力を付ける。
②得意なことに取り組む中で自信を付ける。
③行動の修正を図り、コミュニケーション能力を高める。

（2）指導内容と指導の結果

①基礎学力の向上を図りながら集中力を付ける。
・基本的な漢字の読み書きの指導を、「宿題として学習→授業時間に15分の時間を設定し練習→テスト→採点→まちがい直し」の流れで行ったところ、意欲的に取り組めるようになってきた。
・興味関心のある本等を読む練習を行う中で、読む力と読解力が少しずつ付いてきた。
・教員と身近な出来事を話しながらメモを取り文章化する。作成した文章をワープロで再度作成する方法により意欲的に文章作成ができるようになってきた。

②得意なことに取り組む中で自信を付ける。
・大好きな切り絵の技術の向上に伴い、自信や意欲、集中力が付いてきた。

③行動の修正を図り、コミュニケーション能力を高める。
・自分の行動を振り返り、自分の中の「もう一人の自分」を意識し行動を修正してきた。
・校外学習や自主的活動での係活動で、責任感や自信、達成感をもてるようになった。
・教員が話を丁寧に聞き適切な言葉で言い直す中で、スムースに話せるようになってきた。

4　通常の学級と通級指導学級との連携

・それぞれの担任が、互いに授業参観をして生徒の様子を把握し、定期的な情報交換を行うことで生徒の課題や学習内容を確認している。また、在籍校の各教科担当教員間でも共通理解を図り、どの教科も同じ姿勢で取り組むようにしている。
・通常の学級で生じたトラブルを巡る行動の振り返りの指導を、通級指導学級で行っている。
・通級指導学級で取り組んでいる教材を通常の学級で自主的学習として取り入れている。
・本生徒の得意な面を（美術、体育等）を積極的に評価し、他の生徒への理解を深めている。

5　まとめ

本事例は、通常の学級と通級指導学級双方で本生徒を育てていくという視点に立った指導が中学校段階から行われたケースであるが、徐々に成果を上げつつある。今後は、さらに通級指導学級との連携を深め、基礎的な学力を付ける学習や本人の気持ちを尊重した進路指導を行い、目的意識をもって学習に向かう姿勢を育てる必要があると考える。

指導事例⑥　対人関係に困難があり不登校になった生徒が通級指導学級に通い人とのかかわりに改善がみられた事例

対象生徒

中学校３年生　通級指導学級で指導を受けている。

１　背景

（１）生育歴

・小学校１、２年生の時、友だちを叩く、机の下にもぐって出てこない、教室から出ていく等の様子が見られ、学校に行きたがらないことがよくあった。

・小学校３年生から、一時期を除き小学校卒業までほとんど登校できなかった。

・小学校４年生の時に病院でＡＤＨＤと診断されたが、保護者の服薬に対する不安から通院がとぎれた。

・中学校入学後登校を始めたが、友達から言われた言葉をきっかけに休み始めた。

・中学校２年生になっても不登校が続き、相談機関から紹介され通級を始めた。

（２）諸検査の結果

・ＷＩＳＣ－Ｒ（９歳）全検査ＦＩＱ＝ 99　言語性ＶＩＱ＝ 88　動作性ＰＩＱ＝ 112

（３）生徒の実態

・自分から繰り返しドリルや教科書等に取り組み内容を理解することができる。その結果、不登校状態が続いたにもかかわらず学年相応の学習内容を理解できる。

・言葉で自分の気持ちを表現したり、相手の気持ちを読みとることが苦手である。

・相手の言葉以外の表情や態度を読み取って状況に合わせた行動をとることができないため、周りの人に理解されにくく対人関係がスムースにいかない。

２　通級指導学級における指導

（１）　指導方針と指導目標

〈指導方針〉

担任と安心して話せる関係の中で対人的な不安や緊張を取り除き、他者とかかわる場面を意図的に設定しながら必要な自己表現や他者理解の力を付けていく。

〈指導目標〉

①人と安心してかかわり、言葉による自己表現ができるようにする。

②相手が感じたり考えたりしていることに応じた行動や会話の仕方を身に付ける。

（２）指導内容と指導の結果

①人と安心してかかわり、言葉による自己表現ができるようにする。

・人とかかわることが負担にならないよう、指導時数は週１回１時間の個別指導から始め、得意な教科から徐々に他の生徒と一緒に学習する時間を増やしていった。すると、入級４か月後から他の生徒とすべての学習を一緒にできるようになり、出席も増えて毎日登校するようになった。そして、自分の気持ちを言葉で伝えられることが増えてきた。

・自分から話すことが大変少なかったが、その少ない言葉や様子から本生徒の気持ちを担任がとらえ、言葉で表現して本人に確認することを繰り返した。また、教科学習では、担任との

会話や作文指導も多く取り入れた。その結果、短いながらも自分の気持ちを言葉で伝えられるようになってきた。

②相手が感じたり考えたりしていることに応じた行動や会話の仕方を身に付ける。

・学級活動やグループ学習の場面等で本生徒が相手の感情を読み取ることができるように、そこで起きる出来事や他の生徒の気持ちを担任が一つ一つ説明した。特に、本生徒が他の生徒に受け入れられていることや、他の生徒が本生徒とスムースに関わることを望んでいることなどを丁寧に伝えた。

・他の生徒との気持ちのずれからトラブルになった時、その場面が記憶に新しいうちに担任が状況や相手の気持ちを本生徒に説明し、自分がどのような話し方や行動をすればよかったかを一緒に考えた。

・小グループで、他の人とかかわる場面を想定し、そこで自分の気持ちをどのような言葉や態度で伝えたらよいかをロールプレイングで学習した。そこで相手がどのように感じるのかを担任と本生徒が話し合い、自分の話し方や行動の修正に生かしていけるようにした。

・その結果、はじめは担任が他の生徒との仲介に入っていたが、担任がいなくても集団活動に参加できたり、話をする場面が見られるようになった。また、何気ない言葉かけを被害的にとらえる場面が減少した。

３　通常の学級と通級指導学級の連携

・現在、本生徒は在籍校には登校していない状態であるが、同学年の生徒がいない時には学校に行くことができるので、時間を考慮して在籍学級の担任と会う機会を作っている。

・通級指導学級の担任が通常の学級の担任に毎日の出来事等について情報提供し、本生徒の状態を共通理解するとともに、進路指導等についても検討している。

・通級指導学級の担任は保護者と面談の際に、本生徒の課題や指導による改善点を丁寧に伝えるようにした。保護者も客観的に子どもの実態をとらえることができるようになり、在籍校との連携もとれるようになった。

・本生徒は徐々に自分の得意・不得意な分野や性格について認識しつつあり、進路について担任からの情報を受け止められるようになってきている。

４　まとめ

本生徒は、小学校４年生の時にＡＤＨＤと診断を受けた。対人関係の課題の改善には至らないまま、家庭や学校で次第に自分の気持ちを表現しないようになっていった。しかし、中学２年生から入級した通級指導学級の指導により自分の気持ちを少しずつ表現するようになり、人とのかかわり方を学び対人関係に改善が見られ、欠席もほとんどなくなった。また、自分の得意・不得意な分野や性格について認識しつつあり、進路について担任からの情報を少しずつ受け止められるようになってきている。

今後は本生徒が自分の希望をもとに進路選択ができるよう、保護者、通常の学級、通級指導学級の担任がさらに連携をとりながら支援していくことが課題である。

指導事例⑦　空間認知や対人関係に困難がある生徒に
早期から適切な対応がとられた事例

対象生徒

中学校２年生　通常の学級に通いながら情緒障害の通級指導学級の指導を受けている。

１　背景

（１）生育歴

・言葉に遅れがあり、公的な相談所で相談（週１回１歳６か月～３歳）を受ける。
・３歳より保育園に入園を機会に急速に言葉が増えた。
・小学校就学時検診で紹介された病院において、ＬＤと診断される。
・小学校の担任の勧めで、通級指導学級で週1回90分指導を受ける。
・幼児期から民間の相談機関で週１回の個別指導を受け、図形、自己表現の学習に取り組んでいる。また、指導内容について学校および家庭、専門機関の間で共通理解を図っている。

（２）諸検査の結果

・ＷＩＳＣ－Ⅲ（12歳10か月）全検査ＦＩＱ＝93　言語性ＶＩＱ＝99　動作性ＰＩＱ＝87

（３）生徒の実態

・集中力があり、実技以外の学習面ではあまり課題はない。
・靴やエプロンの紐、はちまきが結べない、プリント類がとじられない、図形が苦手、グラフの読み間違え、球技でボールの扱いが難しい等空間認知や手指の操作性の弱さからくる課題がみられる。
・急な予定変更等に対して柔軟に対応できず、予期しない質問に対して返答につまることがある。このように、人の気持ちが適切にとらえられないなど、対人関係に課題がある。

２　通常の学級における指導

（１）指導方針と指導目標

〈指導方針〉

①通級指導学級で学習した成果を苦手な部分の克服に生かしていく。
②得意分野で活躍の場面を作り、成就感や自信がもてるようにする。
③安心感のある学級の中で友達とのかかわり方を指導して対人関係を広げる。

〈指導目標〉

①自分の苦手な部分を意識し、克服の手だてを身に付け、学校生活に適応する。
②コミュニケーションを豊かにし対人関係を広げる。

（２）校内体制

学年相応に学習に向かうことのできる生徒であるが、学年のケース会で、空間認知や手指の操作性の落ち込みについて共通理解し、学習面で配慮すべき点を点検するようにしている。また、対人関係において、いじめ等にあわないよう生活全般を通して目を行き届かせている。

（３）指導上の配慮事項と指導の結果

①自分の苦手な部分を意識し、克服の手だてを身に付け、学校生活に適応する。
紐を結ぶ、図を描く等苦手な動作について、説明しながら学習した結果、コンパス、定規

等の道具やパソコンの操作も活用できるようになり克服できるようになった。また、美術や技術等の作品の製作が遅れた時、授業時間外に作成することを自ら申し出ることができるようになってきた。

②コミュニケーションを豊かにし対人関係を広げる。

行事では、共同作業やゲームを多く経験させた。このことにより、自分の苦手な部分でも安心して表出するようになり、友達の気持ちや表情を把握できるようになってきた。

3　通級指導学級における指導

通級指導学級を通常の学級のフォローアップの場として位置づける。通級時間は、通常の学級の授業に影響が少ないように配慮している。

（1）指導方針と指導目標

〈指導方針〉

①自信や成就感を大切にしながら、苦手な部分を克服する。

②振り返り学習を取り入れ、人間関係が広がるよう学習を進める。

③自己理解を深め、自信を持たせ、精神面のケアも含めて細やかな手だての工夫をする。

〈指導目標〉

①自分の苦手な面を意識し、克服の手だてを身に付ける。

②場面に応じた人との適切な対応ができるようにする。

③好きなこと、得意なことを生かし積極的に取り組む。

（2）指導内容と指導の結果

①自分の苦手な面を意識し、克服の手だてを身に付ける。

体育行事への準備学習、美術・技術の制作で完成しきれなかった課題への取り組み、定規の利用や作図等の工夫をした取り組みを行ってきた。その結果、一つずつ確実にできるようになり、自分でも意識して克服の手だてを身に付けてきた。

②場面に応じた人との適切な対応ができるようにする。

行動の振り返りにより、人へのかかわり方やペースの合わせ方を学び人間関係が広がった。

③好きなこと、得意なことに積極的に取り組む。

校外学習では、実施の責任者となり企画にかかわった。下調べや資料作りで、パソコンの知識や技能を生かして自信や責任感がもてるようになってきた。

4　通常の学級と通級指導学級との連携

・担任が相互に情報交換を行い課題や学習内容を確認している。また、在籍校の各教科担当教員間で共通理解を図り、どの授業も同じ姿勢で取り組むようにした。

・課題を通級指導学級の個別指導計画で取り上げ、より丁寧な指導ができるようにした。

5　まとめ

本生徒は、幼児期より課題や困難について正しく認識され、通常の学級における学級経営の工夫、通級指導学級におけるきめ細かい指導、主治医・専門機関との連携、社会教育活動への参加等、適切な対応がとられてきている。

今後も、対人関係や手指の巧緻性に関する指導を継続させていく。また、長所を伸ばす指導を大切にしつつ、本人が進路を選択できるように支援していくことが必要であると考える。

指導事例⑧　学習の遅れから不登校になった生徒が通級指導学級に通い
自己表現力を付け意欲的な学校生活を送ることができるようになった事例

対象生徒

中学校３年生　通級指導学級で指導を受けている。

１　背景

（１）生育歴

・学習に遅れが見られ、小学校２年生の時、病院でＬＤと診断された。

・小学校５年生より学校を休むようになり、中学校の入学後、授業が始まると休み始めた。

・中学校２年生の時から担任の紹介で新設された通級指導学級に週２日通い始めた。

（２）諸検査の結果

・ＷＩＳＣ－Ⅲ（12 歳）全検査ＦＩＱ＝ 85　言語性ＶＩＱ＝ 81　動作性ＰＩＱ＝ 93

（３）生徒の実態

・リズム感がよく、明るい性格で、人間関係も良好である。

・語彙が少なく、考えたことの発表や短文作り、文章の読み取りが苦手である。

・かけ算九九はだいたい習得しているが、２桁÷１桁の割り算の筆算に時間がかかる。小学校３年の文章題の意味を適切に読み取ることができず、立式ができないことがある。

・調理でものをこぼしたり、ニス塗りがうまくできないなど、手先の不器用さがあり、文字を書くことに苦手意識がある。

・思いがけない言葉かけに対し適切に気持ちを伝えられず、不機嫌になることがある。自信がないことを質問されたり、課題への取り組みをうながされたりすると、反抗的な言動をとることが多い。

２　通級指導学級における指導

（１）指導方針と指導目標

〈指導方針〉

本生徒の心情を受け止め精神的な安定をはかりながら、適切な自己表現が出来るようにする。また、学習内容の理解や成功体験を積むことで自信をもてるようにし、自分の得意、不得意についての自己認識を深め、進路について自分の考えをもつことができるようにする。

〈指導目標〉

①言葉による自己表現の方法を身に付ける。

②学習に取り組む意欲を高め、基礎学力を伸ばす。

③出来ることや興味のあることを増やす。

（３）指導内容と指導の結果

①言葉による自己表現の方法を身に付ける。

・状況を意図的に設定した場面でどのようにしたらよいか考える学習や、行事等の感想をまとめる学習場面を、担任と本生徒とのＱ＆Ａを中心に展開し、自分の気持ちに近い言葉で表現する力が身に付くようにした。

・作文は、質問に答えた内容を担任が口述筆記して、それをまとめてパソコン入力させ、負

担を少なくした。

・こうした指導の結果、少しずつだが自信をもって自己表現できるようになった。

②学習に取り組む意欲を高め、基礎学力を伸ばす。

・本生徒が学習等に意欲的に取り組めるように授業の始めに時間内に取り組む学習内容を提示し、進め方等の見通しをもてるようにした。

・「できた」という満足感が得られるよう、答えられそうな課題を多く用意し、できない時はやさしい課題に戻ってやり直したり、別の方法に換えたりした。

・国語は、小学校２～３年程度の文章の読解や、漢字の読み書き、決められた言葉を使った短文作りをさせたところ、文を読むことに慣れ、問題の答えを推測できるようになった。

・数学は、四則計算を実生活で使えるように、絵や具体物を用意して文章問題を中心に取り組んだところ、立式して計算ができるようになった。

・英語は英検の音声教材を使用し、発音・会話文に慣れさせるとともに、和訳を口頭で答えたり、単語の並び替えを番号で記入する等、文字を多く書かない工夫をして心理的負担を少なくしたところ、意欲的に取り組むようになった。

③出来ることや興味のあるものを増やす。

描画用パソコンソフト、和太鼓、ギター、スポーツ、調理等に取り組ませ、余暇を充実させるとともに、進路選択に生かすことを目指した。

この取り組みにより、描画用パソコンソフトの操作ができるようになり自信を付けた。ダンスやギターにも興味を示し、休み時間に自分から担任にやり方を聞いてくることもあった。

３　通常の学級と通級指導学級の連携

通級指導学級の担任が在籍校を訪問し、指導目標の確認や学習内容、成果を伝えている。また、進路に関する情報も共有できるようにし、連携した指導ができるようにしている。

４　進路指導

高等学校等を見学した後で教員と感想等を話し合い、その内容を自分で表にまとめて進路を考える等の取り組みをした。このことで本人の進路の希望も明確になり、通常の学級の担任、通級指導学級担任、保護者が一体となった指導により志望先も決まりつつある。

５　まとめ

本事例では、通級指導学級において心情を受け止めながら言葉による自己表現力を付け、自信をもたせる指導を進めた。その結果、学習に意欲的に取り組み表情も明るくなるとともに、入級時に見られた反抗的な言動も減った。

今後は、進路先も含めて連携をさらに深め、本人の将来の生活を考え具体化していくための支援を充実させることが課題である。